西吟新譯

文學士
小原無絃譯

西吟新譯

小原無紘 著

林

われとしもなき憧憬になりにし此の詩巻よ。生れ得てつたなかる性の筆もて、うつし出さむとする甲斐なさは、譬はゞ牧の童が、春日の光り満ちたる花野の美しさに思ひ泌みて、手なる笛つと投げつ、渚の眞砂路に蘆の葉もて寫し見むとするにも似たらむか。あはれ、詩の天に居ます人々の御靈よ、いやしき人の子のにげなき業をも無下には咎め給ふまじかと、たゞそれをのみ心だのみにして、あなかしこや。

戦地なるわか弟の中尉に

西吟新譯目次

手弱女のほこり……一
泉……四
咽ぶを休めよ……一七
虹……二一
寫眞帖に題す……二三
森なるいとし子……二四
ルーシー、グレー……三一
貴女と小兒……四五
麥刈る少女……五一
虹に與ふ……五七
郭公に與ふ……六六
水仙花に與ふ……七三

鳩の泉……七六
物言はず……七八
四月の二朝……八三
朝露淡き櫻草に與ふ……九四
妹に寄す……九九
菫の歎……一〇七
あはれ鶯……一一三
蘆の葉……一一六
奇しきは戀の……一一九
天なるメリーに寄す……一二四
兄弟七人……一二九
綠の紅雀……一四二
クロリス……一四九

西吟新譯

文學士　小原無絃

手弱女のほこり（すこっと）

ほこり心の手弱女が
東雲。森をさまよへば。

知更鳥たえに歌ひつゝ
茂る梢にとまりけり。

『いつか。わが身は嫁ぐべき。
言へ。麗はしの知更鳥よ。』
『六人のたけき壯夫が
なれをみ寺に移すとき。』

『鴛鴦のふすまを誰かしく。
小鳥。眞實を語れよや。』
『なれ埋むべく穴を堀る
髮眞白なる墓守よ。』

『墓の上を飛ぶ螢火は

とはになれをば照すべし。
よくこそ來ませ。手弱女。と梟
は塔に歌ふべし。』

泉

（うゑーづうゑーす）

へだてなく語る二人の
言々に眞情こもれり。
予は未だいと若きも
友ははや古稀を過ぎたり。

天を掩ふ樫の木蔭に
身を伏せて苔を褥や。
泉あり。草地に湧きて

足のべを流れ去るなり。

『心地よき水のしらべに
和せんかな。鄙の古歌。
しからずば。夏の眞晝に
ふさはしの節や聽かなむ。

『しからずば。古鐘を題に
去る四月君がものし丶
たぐひなきおかしの節を。
この蔭に歌ひ給へな。』

物言はず。友はひたすら
木蔭なる泉瞰りて

かくて後。やをら答へぬ。
白髪の無邪氣(さかなき)友は。

『堰(せ)かれんも意とせぬ水よ。
たのしげに流れ去るかな。
幾千歳さやぎ靜かに
今のごと流れ去るべし。

『この良き日。想ひ起すは
この水の岸に身を伏せ。
幾度かおのが若きを
ほこりてし昔ばかりぞ。

『予が眼(まみ)は涙にくもり。

予が胸はたゆげにふるふ。
あゝ昔。わが聽きなれし
その聲の耳に殘るを。

『人老うるも流はやまず。
さはれ。かの賢なる者は
過ぎし世をうしと思はず。

現し身を痛むことなし。

『君見ずや。葉蔭のつぐみ。
天に入る丘べの雲雀。
囀るも。はた啼きやむも。
おのがじゝ心のまゝぞ。

『あゝ鳥は天つ御法に
おぞましの抵抗せじよ。
たゞ。幸の若き世偲び
ほだしなく老をたのしむ。

『さはれ。人は重法に堪えず。
追憶の昔嬉れしみ。

たのしげの顔はするとも。
うれたみのことのみ多し。

『起き臥しを同じやからの
野邊送り。祀の場に
哭かぬものありとしすれば。
おゝそれよ。氣樂人のみ。

『予が齢已に傾き。
わが生はもやがて盡きなむ。
予を愛づる人は多きも。
君のみぞ。まこと愛づるは。』

『このなげき。君にありとは

自と予とを誣うるならずや。
予は幸の野に生を送り。
えうもなき歌に病む子ぞ。

『許せ。君。予はよろこびて
君が亡き愛兒たらむを。』
友は予が手を執り言ひぬ。

『奈何せん。しかもならじを。』

友と予と泉をはなれ。
苔しげき山羊の小徑を。
小ばしりに降り行きては。
森に入り。木の間くゞりぬ。

レオナードの巖へと辿る
みち〳〵を友は歌ひぬ。
山寺の古鐘を詠みし
おもしろの歌のひとふし。

咽ぶを休めよ（ふれっちやー）

咽ぶを休めよ。いざゝらば。
歎くを休めよ。いざゝらば。
悲むとても。行く水の
過ぎにし時を停め得んや。

うれしき雨のよしやえし。
摘みし菫に濺(そそ)ぐとも。

凋れし小莖のよみがへり。
生ひ立つことのあらめやも。

髪の縺(ほつ)れを搔き上げよ。
容(なり)ゑましげに整へよ。
運命(さだめ)あやしき行末を
人は見るだに能はじな。

翅(つばさ)張りたる夢のごと。
歡樂(よろこび)はやく飛び去るを。
悲みのみの如何にして。
打ち續くべきことやある。
心(むね)痛むるや。痛むこそ。

これ。かりそめの傷ならめ。
いともやさしき麗はしき
子よ。悲むな。いざさらば。

虹
(うをーづうをーす)

み空なる虹を見るなべ。

わが心ひたも躍るよ。
そのかみも此くぞありける。
今もなを此くぞあるなる。
老いぬるも此くぞあるべき。
しからずば死ぬに如かじよ。
童こそ人の父なれ。
あゝ清き心保ちて。
わが生をば過ぐしてしがな。

寫眞帖に題す（うをーづうをーす）

小なるつとめも同じつとめよ。
卑しき友とて嗤ふ勿れ。
野菊はかほそき影をなげて

殘れる露をば日より護る。

森なるいとし子（作者不詳）

いざや聞けかし。わが寵兒（まなご）。
遠き昔の其上よ。
二人の小きいとし子の
われは其名を知らねども。
眞夏の晝のこと丶かや。
いつしか人にさらはれて
森に棄てられたりしかば。
人これよりぞ云ひけらく。
あはれ森なるいとし子よ。
あはれ森なるいとし子よ。

あはれ森なるいとし子を
知り給へらん者なきや。

二人は咲ける花折りつ。
飛びかふ鳥を仰ぎ看つ。
摘み喰ふとては山苺(いちご)。
實はくれなゐの草苺(いちご)。

されど二人はくたびれて
歸り行かまく語りけり。
あはれ森なるいとし子よ。
あはれ森なるいとし子よ。
あはれ森なるいとし子を
知り給へらん者なきや。

さはれ忽ち日は暮れて
心かなしうなりにけり。
日は入り果てぬ。さればとて
枝もる月の影もなし。
二人は泣きぬ。なげかひぬ。
はた聲あげて叫びけり。
かくて曉まちもえで。

身を横へて死にてけり。
あはれ森なるいとし子よ。
あはれ森なるいとし子よ。
あはれ森なるいとし子を
知り給へらん者なきや。

紅うるはしき知更鳥の

死せる二人を見し時よ。
苺の葉をば含み來て
むくろを厚く掩ひかくし。
長き夜すがら。夜もすがら。
枝さしかはすその蔭に。
聲もゆかしく囀づりし
歌のしらべに言ひけらく。

あはれ森なるいとし子よ。
あはれ森なるいとし子よ。
あはれ森なるいとし子を
知り給へらん者なきや。

ルーシー、グレー
（うゐーづうをーす）

照子の身上聞きしことあり。
東雲の野をわれ過ぎて
はしなくも逢ひもしたりき。
寂しげにひとり行けるを。

友ひとり。照子はもたず。
はてしらぬ沼地に棲みぬ。

人の世におひ立ち出でし
なつかしのものゝ極みや。

今もなほ鹿の子あそべど。
野兎は野の面はしれど。
なつかしの照子の顔は
とこしへに見ることあらじ。

『あゝ今夜しけにならめど。
汝は市に行かでかなはじ。
いとし兒よ。灯を持ち行きて。
雪深し。母を導け。』

『父上よ。いざ出で立たむ。

今し日の入りしばかりよ。
寺の鐘鳴りしも二つ。
はや月は彼方に出でぬ。』

かく聞きて父は斧とり
山柴を截りつ。碎きつ。
ひたすらに手業はげみぬ。

見よ。照子灯をさげ出でぬ。

小牡鹿もかくは疾からじ。
みち〳〵を足に任せて
踏み破れば散るこな吹雪。
さながらに煙と立ちぬ。

時ならずしけは起りぬ。
照子はも路に迷ひぬ。

丘いくそ。越え越え行けど。
あゝつひに市に達かず。

たよりなの親は夜すがら。
はて遠く呼びつゝ行きぬ。

しかはあれど。しるべとならむ
物もなく。音もなかりき。

かくて。夜の明くるを俟ちて。
丘の上に野を見渡せば。
伏屋よりほど遠からず。
木づくりの橋ぞかゝれる。

雪の面に照子の足の
跡あるを母の見しとき。
父も泣き共に叫びぬ。
『はや世には亡きか。わが子は。』

きりぎしの丘べを下り

足あとを二人は追けぬ。
茨垣やれ間をくゞり。
石墻の長きに沿ひて。
廣野原横ぎり行けば
足あとはなほもあざやか。
行き行けど見失ふことなく。

はてつひに橋べに着きぬ。
雪深き岸より跡を
一つゞヽ辿りて行けば。
橋板の半ばに至り。
あはれ又見るを得ざりき。

今もなほ人は言ふなり。
なつかしの照子生けりと。
人氣なき荒野の路に
ともすれば見ることありと。

見かへらず。野越え丘越え
ひとすぢに照子行く行く。

さびしげに歌ふその歌。
聽け。風にたぐひ來ると。

貴女と小兒（ひーまんす夫人）

貴女
など行くらんか。おゝ和子よ。
汝(な)が故山(ふるさと)の家は荒れ。

軒栲ち。壁も頽れたり。
さはれ聳ゆるわが館は
石像ならび輝きて。
日光(ひかげ)繪に榮(は)え眼もまぶし。

小兒
うらゝ夏日の長き日を
兄弟(はらから)遊ぶ野ぞみどり。

攀る小徑に苔赤く。
蜂こそつどへ。麝香草。
岩にヒースの花も咲く。
許し給へよ。われ行かむ。

貴女
あゝわが亭に甘んぜよ。
ゆかしの調べ茲に滿つ。——

静けき眞晝笛ひゞき。
微風に小琴ひとり鳴る。
森に囀る鳥の音は
汝が故山に聞かれじよ。

小兒
夕榮西に落つるとき。
膝にまどろむ乳子かゝえ
母の唱ふるひとふしに。
優らん歌はあらじかし。
よべ。われ夢にそを聽きぬ。
許し給へよ。われ行かむ。

貴女
乳子もろともに汝が母は
草葉のかげに休らひて。

足跡さへもあらじ。など
戸に倚る母の歌あらむ。
いざ來よ。春戸の花園に
濃紫(こむらさき)の葡萄摘まむかな。

小兒
母はわが家にあらじとや。——
さはれ兄弟うちむれて

野草の花や萃むらむ。
蕨や摘まむ。さゝ川に
笹舟浮べあそぶらむ。
許し給へよ。われ行かむ。

貴女
汝が兄弟は家を出で
今山の端は荒れはてぬ。

蕨。清水のへにのびて
舟流したる水さびぬ。
和子よ。平和の幸を得よ。
汝が伏屋には人もなし。

小兒
兄弟山にあらずとも。
小鳥飛ぶらむ。蝶舞はむ。

鹿たのしげに遊ぶらむ。
ヒースたはゝに蜂鳴かむ。
水ほとばしり風吹かむ。
許し給へよ。われ行かむ。

麥苅る少女

（うをーづうをーす）

君見ずや。野中にひとり。
歌ひつゝ刈りつゝひとり。
鄙少女ひとり立てるを。
停まれ。君。行かば徐かに。
たゞひとり刈りては束ね
さびしげの歌をうたふに。
おゝ聽けや。歌の韻(ひゞき)は

幽邃(しづか)なる谷にあふるゝ。

アラビヤの砂漠をわたる
旅人のいこふ木蔭に。
うぐひすの啼き落すなる
なつかしの節やかゝらむ。
ヘブライの遠きはてなる

海原の寂寞(しゞま)破りて。
ほとゝぎす名のる春べの
なつかしの聲やかゝらむ。

少女子の歌ふは何ぞ。
つらかりし昔のことを。
そのかみの軍のさまを。

思ひ出のかなしき節か。
あるは又日々のいたみか。
世のつねの卑きしらべか。
あるは又浮世にもれぬ
うつゝなる憂さか。歎きか。

そはとまれ。少女が歌ふ

歌にはてありとしもなし。
歌ひつゝ刈りつゝひとり
身をまげて鎌を執りつゝ。
われ聴きて足るを覺えつ。
さらばとて丘越え行きぬ。
その調べ聞えずなりし
あとながく胸に沁みけり。

虹に與ふ　（かめる）

雨風正に霽れんとし
大空高し。凱旋門。
「なれそも何」と説明を
ほこれる科學にもとめじよ。

いはけなき眼に打ち看れば。
天と地との中空に
昇り行くなる幸魂の
宿りの塲か。汝(な)れはそも。
光學如何に說かばとて

つひにながが影現じ得じ。
輝く階にひそむてふ
黄金白珠われ夢む。

科學萬象の面より
神秘の被絹(おほひ)とり去らば。
くすしき彩はあともなく

冷き法則の外なけむ。

美しき虹よ。如何なれば
光の艶衣久方に
織られけるかは嚴として
神のみことに書かれたり。

洪水まぬかれし地こえて
汝れ神約を照しゝに。
ノアのやからは立ち出でゝ
大み徵を仰ぎけり。

人ののぼらぬ山の端に
そが黄の光ゑみし時。

母。兒を高く抱き上げて
神のきざはし仰ぎしよ。

ながこの祝ひ助けまく。
洪水(みづ)まぬかれし地の上に
響きたりしよ。ほぎごとは。
歌ひそめしよ。詩人(うたびと)は。

詩神歡喜の眼を上げて
汝(な)れが光を見給ひぬ。
あはれ太古の預言(うらごと)は
今も詩人の說くところ。

地はかをりを汝に與へ。

歌ふ雲雀は汝を迎へ。
照りつゝ清き野の面には
眞白き靈芝生じけり。

山の上。塔の上。市の上に
懸るながら影うるはしや。
千尋の太洋（わだ）の底深く

映る汝が影うつくしや。

み空のくらきはてに濃く。
汝が彩若く見えつらむ。
方舟（アーク）ゆ鷲は汝が光
はじめてかすめ翔りけむ。

神のみことは仇ならず。
今なほ汝れは天に現れ。
千古かはらぬ色清く
平和のしるし示すかな。

郭公に與ふ（うをーづぅをーす）

まらうどよ。曾ても聞きつ。
今もまた聞くぞうれしき。
おゝ汝れを鳥とや呼ばむ。
たゞよへる聲とや呼ばむ。

草の上に身を臥せ聞けば。
ふたきだの汝れが啼音は

いと遠く。はた又近く。
傳ふめり。山より山と。

日も匂ひ花咲く谷に
何となく汝れは啼けども。
しかすがにわれに齎らす
夢の日のむかし語りや。

珍らしや。春の寵兒（まなご）よ。
今もなほ鳥とおぼえず。
目に見えぬものよ。聲音よ。
或奇しきものゝ一つよ。

小學にわが在りしころ。

聞きなれし同じ聲音よ。
くさむらに。木々に。御空に
百千度覓(み)てし呼ばひよ。

幾度か。汝れを尋ねて。
野に杜にさまよひぬれど。
あゝ汝れは希望よ。戀よ。

慕へども姿は見えず。

さはれ。今も汝れを聞くなり。
わがこゝろ夢か。うつゝか。
黄金時代(うましよ)の昔(かみ)に入るまで。
野に臥して汝れを聞くなり。

幸鳥よ。汝れをし聞けば。
わが歩む下界はまたも。
まぼろしの妙の郷かな。
こや。汝れにふさへる園よ。

○水仙花に與ふ（へりつく）

あゝ麗はしや。水仙花。
豐榮昇る朝日子の
なほひむがしに懸れるに。
はやも競うて褪せ行くを。
見るには堪へぬ涙かな。
隙行く駒の疾しや。日の
夕ぐれ歌のひゞくまで。

あはれ。停れよ。散らざれな。
共に祈禱をなし了へて。
野の徜徉に出で立たむ。

人のこの世に在るはなほ。
汝れにひとしく長からず。
春一時の命かな。

盛り短く朽ち行くは。
汝れのみならず物皆も
もれぬならひの世なりけり。
時去り來れば人も死に。
雨の夏日に於けるごと。
朝おく露の玉のごと。
かはき果てゝはあともなし。

鳩の泉の

（うをーづうをーす）

鳩の泉のへにあたる
人の通はぬ野に棲みし
少女を愛づるものもなく。
讃ふるものもなかりけり。

人目をさけて苔むせる
岩間に咲けるつぼすみれ。
み空に星のたゞひとつ
輝くよりも麗はしや。

知られで過ぎし少女子の

照子逝きしと誰かしる。
かれは墓なり。さるゝあゝ。
など悲みにえ堪へんや。

物言はず（ばいろん）

物言はず。涙垂れつゝ。
断腸の思ひ忍びて。
汝れとわれ別れし時よ。
幾年（いくとせ）の逢瀬あらじと。
汝が頬は蒼（あを）白くぞなりし。
汝がキッス寒くぞありし。
思ほへばけふの愁は
その時に知られたりしよ。

ほろ〳〵と曉(あけ)の白露
わが額に寒くぞ落ちし。
落ちし露けふのなげきを
あらかじめ教へたるなり。
汝が誓みな空なりき。
汝が名譽(ほまれ)地に墜ちたり。

汝が名をば人の言ふ聞き
はづかしとわれは思ひぬ。

わがへにて汝が名呼ぶ音は
弔らひの鐘とひゞきて。
ひとゆすりわが身おのゝく。
いかなればしかは戀しき。

人皆は汝れとわれとの
なからひを知らであらんも。
わがうらみとはに消えじよ。
語るべく餘りに深し。

人知れず。逢ひしはふたり。
物言はず。痛むはひとり。

空だのめわれたのみしを。
汝が心うつり果てたり。
長き年經たらん後に。
もし汝れに逢ふことあらば。
わが會釋いかゞあるべき。
物言はず涙垂れんか。

四月の一朝
（うたーづうたーす）

茜さす日はうら〳〵と
友とわが行く野に照りぬ。
四方を見渡し友は云ふ。
『思へば悲し。そのかみや。』

光る白髮の友はこれ
村學校の長にして。
春の祭に誰も見る
心輕げの一人なり。

一日を丘に過すべく。
その朝野べの草踏みて。

靄たつ水のへに沿うて。
行く行く友と輿に入る。
われは問ひけり。『うましよや。
あはれ如何なる憂さありて。
このうるはしの日の下に
君はなげきを漏すかや。』

またもや友は停まりて。
東の空に聳え立つ
山の頂凝視りつゝ。
かくぞとわれに答へけり。
『ゆかりの色のひだ長き

彼方の雲をながめては。
又三十年のそのかみの
かゝりし日をば憶ふかな。

『憶へばさなり。麥青き
かなたの丘の空高う。
かゝる色こそ浮びけれ。

おなじ四月のそのあした。
『春も漁(あさ)るに季(とき)好しと。
釣竿肩にさまよひの
はしなく寺にわれ入りて
娘の墓のへに立ちぬ。

『里のほこり子九つの
日もなほあさく歌ひけり。
あはれ。思ふにうぐひすの
生れなりしか。うぐひすの。

『むすめは土の下にあり。
愛でしこゝろは變らねど
その日よ。更にゆかしくぞ
いと身にしみて覺えける。

『おくつき。どころわれ去りて
水松の蔭の行きずりに
逢ひてし花の少女子は
髪にあしたの露貫けり

『花の一籠いたゞける
額なめらかにいと白し。
かくうるはしの子を見るぞ
清き快樂のひとつなる。

『岩間をはしる溪川も
少女の足に及ばじよ。
海のおもてに舞ひおどる
波より幸は多かりき。

『漏るゝなげきの苦しさに
われは堪へ兼ね見てしかど。
その少女子をわがなれと

願ふこゝろはなかりけり。」

友の逝きつる今もなほ。
かの日。かの時。野の花の
一枝とりもちわがそばに
立ちし姿の見ゆるかな。

朝露滋き櫻草に與ふ（へりつく）

愛兒よ。などさは涙垂るゝ。
白露玉なす清きあした。
汝等は生れたり。何を痛む。
痛むが故なる涙なりや。
百花そこなふ強き雨も。

千草を吹き折る猛き風も。
汝等はうけたることもなけむ、
はた又衰へ老いしならず。
汝等は今なほいとゞ幼し。
はた又浮世の人のごとく。
汝等はひがめる者にあらず。
然るを何ぞや。みなし兒等に
似たるもあはれや。美はしき花の。
譬はゞ舌なほ動かざるに。
涙を垂れつゝ痛む。見ては
ひそかにあやしと心惑ふ。

語れや。愛兒よ。櫻草よ。
俛れ。涙にむせぶ花よ。

汝等がうら泣く故を語れ。
あゝそも睡眠(ねむり)の足らぬ爲か。
うれしき子守歌(うた)なきが爲か。
菫のすがたを見ざる爲か。
戀ひ戀ふ男女(ふたり)の心むすぶ
ゑにしのきづなとならぬ爲か。
否々。汝等はかゝる故に

涙を垂れつゝ泣くにあらず。
自ら痛みて泣くにあらず。
さりや。痛みて泣くにあらず。
大なる。小なる。尊き。卑き。
あらゆるこの世の事物(こと)はすべて
艱難辛苦を經てぞなると
われ等に諭さん爲の涙。

妹に寄す（うなーづうなーす）

わが庵よりほど遠からぬ所にてものし。
男の童に持たせやりたる。

彌生のはじめ雲もなく。
心のどけき時は來ぬ。

軒に聳ゆる落葉松(からまつ)ゆ
知更鳥(こま)ほがらかに歌ふなり。

空にたゞよふ天恵(みめぐみ)は
葉もなき木々に。山々に。
野べのみどりの草にだに。
うれしき色を授くめり。

あゝ願はくば。我妹子よ。
朝餉はすでに了へたるに。
朝のつとめをとくすてゝ。
いざ來て共に日を浴びよ。
エドワード汝れを導かむ。

森に入る日の衣着けて。
書を抱かずとく來ませ。
今日は爲すなく過してむ。

あゝうれしげの顏するも。
生ける唇は何かせむ。
今日をぞ。妹よ。新たなる

年の始と記してむ。

普く生れむ愛は今。

胸より胸に。地より人に。

人より地に忍び入る。

あはれ。自感の時なれや。

今の刹那は道理の

五十年の上を訓すなり。

さりや。心の底深く。

春の靈氣は沁みつべし。

とはに心の奉すべき

無韻の掟定めてむ。

かくて年月すぎ行かば。
やがて安定ぞ得らるべき。

大宇宙にみち亘る
神の恵の力より
靈魂の法を作りてむ。
靈魂は愛となりぬべし。

童の歎

（ひーまんす夫人）

妹よ。來ませな。いざ來ませ。
森に入る日の衣着けて。
書を抱かずとく來ませ。
今日は爲すなく過してむ。

『あはれ。弟を呼ばひてよ。
えも遊ばじな。ひとりして。
花鳥しげき夏來しを。
何處に行きし。弟はも。

さすや。日影をかすめつゝ。

蝶うらゝかにきらめくも。
追ひ行かんとは思はじよ。
あはれ。弟を呼ばひてよ。

二人が庭の木を繞り。
蒔きしその花茂りしを。
葡萄たはゝに實のりしを。

あはれ。弟を呼ばひてよ。』

『汝が聲彼は聞き得じぞ。
返り來まじぞ。いとし子よ。
春日の如くゑまひてし
顏とこしへに汝はえ見じ。

『快樂は薔薇のうらゝけき
短き命彼ぞ得し。
行いて遊べよ。いとし子よ。
弟は天の上にあり。』

『さらば。花鳥のこしゝか。
甲斐なくわれは呼ぶのみか。

永き夏の日暮るゝとも
再び返り來らずや。

『さらば。川のべ。森の中。
なしゝ遊びは絶えつるか。
かくとかの時知りもせば。
いといつくしみおかましを。」

あはれ鶯（うゑーづうゑーす）

あはれ。鶯。汝れこそは
こゝろ燃え立つ鳥ならめ。
鋭きかなや。汝が調べ。
酒のみ神が言ひ寄りて

汝れをば情人(いろ)と契りしか。
木影。夕露。夜の寂(さ)びを
忌みさげすむは汝が歌よ。
かはらぬ天恵(めぐみ)。愛は今。
やすけき森に眠れるを。

今日しも鳩の啼く聽けば。

何とはなしになつかしや。
木がくれ聲は消え去るも。
微風(かぜ)吹くなべにたぐひ來つ。
小やみだになくたゞクヽと。
うらがなしさの音ぞほそき。
ゆるく始めて斷ゆるなく。
歌ふもさびし。愛の歌。

胸の歡樂。信の歌。
あゝわが好む歌はその歌。

蘆の葉

（ぶらうにんぐ夫人）

われ喇叭ならじ。芦の葉よ。
媚びて吹かねば。白銀の

いつはり多き音は出でじ。
王の召には鳴らねども。
一度鳴れば鳴りひゞき。
賤のをのこを跳らしむ。

われ喇叭ならじ。芦の葉よ。
やぶれ芦の葉。げに風ぞ

さびしき岸に吹き上げし。
女の子。男の子がなげきをば
心を込めて吹きたらば。
とはにひゞかむ芦の葉ぞ。

われ喇叭ならじ。芦の葉よ。
川岸近く網を曳く

奇しきは戀の (ぅたーづうたーす)

海士に告げまし。われ網を
裂くことあらじ。よしや。又。
海士ころぶとも手は刺さじ。
かくてわれをば棄てよ。草間に。

奇しきは戀の力かな。
胸に浮びしひとことを
ひそかに妹に云はましと。
思ひ立ちては居も堪へず。

妹すこやかに麗はしく。
彌生の花に似つる日の

月ほのあかき夕まぐれ。
妹が家さして迷ひ出ぬ。

見渡す野べのはて遠く。
かゝれる月を打ち守り。
駒の足搔をいそぎつゝ。
なれたる路を辿りけり。

果實(このみ)の園に行きつきて。
照子が宿の灯をそれと。
やをら丘べをおりしとき。
月おもむろに落ちそめぬ。

神のやさしきみ惠の

ゆかしき夢に耽りしが。
忽ち眼はゆくりなく。
入る月影にとまりけり。

蹄の音もかろらかに。
駒はあゆみて停まらず。
をりしも月はいやあかく。

屋根のかなたに沈みけり。

吉からぬ思ひふとしるぞ。

戀する人のならひなる。

胸はさやぎぬ。『照子もし

亡き人數に入りてありなば』。

天なるメリーに寄す（ばーんす）

あけ行く空にしばしいざよふ

光もうすきやよや。明星。

よしや。晝なほ消えであるとも。

愛しきメリーのなど返らんや。

あはれ。メリーよ。逝きにし影よ。

そも何處にか汝れは休める。
汝れは見るかや。野に伏すわれを。
汝れは聞くかや。胸さくなげきを。

聖きかの時。われ忘れんや。
われ忘れんや。聖きかの杜。
あかぬ別離をアイアの岸に。

暮るゝも知らず。惜みしものを。
名ごりゆかしきその日のさまは
心にながく記されつるよ。
われのかひになれは凭りしに。
などそを最後と孰か思はむ。

眞砂を接吻むアイアのほとり。

群らおふ木々のみどりぞ滋き。
かをる樺の木。眞白き茨。
枝さしかはし相思ふごと。
花飛び亂れ花散り布きて。
鳥は小枝に戀を歌へど。
夕雲すでに西にあかきを。
看ては羽ある日をこそ恨め。

いよ丶ながめて追憶つきす。
いよ丶われから思ひ亂る丶。
行く水瀨をば深むる如く。
時は愁をたゞ深うする。
あはれ。メリーよ。逝きにし影よ。
そも何處にか汝れは休める。

汝れは見るかや。野に伏すわれを。
あはれ。メリーよ。逝きにし影よ。
そも何處にか。汝れは休める。
汝れは見るかや。野に伏すわれを。
汝れは聞くかや。胸さくなげきを。

兄弟七人

（うゑーづうゑーす）

息吹も輕く現し身に
あまねく生命覺ゆなる
こゝろひとへの幼兒の。
いかで知らんや。死てふもの。

小屋守る小さき少女子の

年は八つと答へけり。
髪いと厚く渦なして
額（ぬか）にかゝれり。房々と。

なりは鄙びて見ゆれども。
身にはつゞれを纏へども。
そが眼はいとゞ麗はしく

見るもうれしき少女かな。

『あはれ小き少女子よ。
汝が兄弟（はらから）はいくたりぞ。』
『七人なり。』と彼は云ひ。
いぶかしげにもわれを視ぬ。

『何處にあるぞ。語れかし。』
かれは答へぬ。『七人よ。
二人は棲みてコンウエイ。
二人は去つて海にあり。

『わが身の兄と妹なる
二人は墓に眠れるよ。

墓に眞近き小屋占めて。
母もろともにわれは棲む。』

『二人は棲みてコンウエイ。
二人は去つて海なるに。
なほ七人と汝れは云ふ。
少女語れよ。そのわけを。』

小き少女は語りけり。
『さなり。兄弟七人よ。
木蔭の墓に床占めて
二人はとはに眠れるよ。』
『少女子汝れは走るとも。

汝がうつし身は生けりとも。
墓に二人の眠れらば。
さらば確かに五人なり。」
少女答へぬ。『青々と
二人の墓は見ゆるなり。
母の小屋より遠からず。

二つならびて立てるなり。

『そこに靴下われは編み。
そこに頭巾のへりをとり。
そこに坐りて二人にぞ
聽（きか）さまほしう歌ふなる。

『入日の光うるはしき。
君よ。夕のをり〳〵よ。
われは小皿をとり上げて。
夕餉をそこに食ふなり。

『先立ちたるはジェンなりき。
かれは寢床に泣きつるを。

神の來ましてくるしみを
とりましたれば行きけるよ。

『妹が墓に寢ねしより。
草葉の露のひるなべに。
わが兄ジョンと二人して。
墓うち廻り遊びけり。

『眞白に雪の積みしとき。
墓にてともにすべりしを。
わが兄ジョン、もさそはれて。
妹のそばに眠りけり。』

『天に二人の在りとせば。

さらは兄弟幾人ぞ。』
小き少女は答へけり。
『あはれ。まらうど。七人。』と。

『さはれ。二人は死にたるぞ。
二人の魂は天にあり。』
かく云ひすて丶去らむとも。

少女はなほも答ふべし。
『否。兄弟は七人。』と。

綠の紅雀 (うゐーづうゐーす)

花びら雪と亂れ布く
果樹(なりき)の蔭をとめ來れば。

塵のけがれのあともなく。
さすや。麗らの春日影。
あはれ。こゝなる腰掛に
身を恁せながら今し又
去年の友なる花鳥を
迎へ得るこそ嬉しけれ。

祝辭を享けよ。紅雀。
ゆかし鳴く音よ。美し羽よ。
鳥の族は多けれど。
汝れに優らむものあらじ。
綠の美衣を身に纏ひ。
今日の集會の長として。
青春の宴樂を指揮る。

あゝこの園はなが領よ。
鳥。蝶。花はうち擧り。
戀男戀女の群なせど。
汝れのみひとり飛びかひて。
今日の事務とる汝れはげに
おのが快歡傳ふなる

それよ。空氣に似たるかな。
天惠亭けたる汝れなれば。
ひとりたのしく事務とれよ。

そよ吹く風にひら〱と
搖ぐ叢なす榛樹の
梢を占めて飛びもせず。

いとゞ快樂に耽けれども。
空に舞ふかとまがふかな。
今。彼れ翅（つばさ）うち振れば。
陰影（かげ）と微光（ひかり）に包まれて
小き姿は又見えず。

そよ吹く風にひるがへる

落葉とばかり見まがへば。
庵の軒端に移り鳴く
歌よさながら湧く如し。
あはれ。茂みを飛びかひて。
しばし裝ひし聲もなの
木の葉あざけり嗤ふめる
その悦喜（よろこび）の音は高し。

クロリス（バーンズ）

我妹(わぎも)。あれ見よ。森みどり。
草花づゝみ麗はしや。
薫れる風は花を搖(ゆ)り
汝が黒髪をはらふなり。

雲雀は宮居よそに見て
賤の伏屋の上に啼く。
王。牧の子のわかちなく。
自然はゆかし。ほゝ咲(ゑ)むよ。
まばゆき殿に伶人(うたびと)の

妙への絃の音鳴らば鳴れ。
今、牧の子は草笛を
吹きやめ。樺の杜にあり。

尊(たか)き宴樂(うたげ)は天さかる
鄙の踊りをさげすまむ。
さはれ。眞白き茨野に
つどふわれ等のたのしさよ。

花咲く谿に牧の子が
戀かきくどく訛言(なまり)にも。
大宮人があてやかに
語る眞實はこもれりな。

清き汝が胸かざるべく
摘みし此の花。宮人の
誓がための彼の美球。
此れと彼れとの愛ぞ異なる。

西吟新譯 完

西吟新譯奥付

明治三十八年九月廿八日印刷
明治三十八年十月一日發行

定價金三拾錢

不許複製

譯者 小原要逸

東京市本郷區駒込東片町廿六番地
發行者 吉田正太郎

東京市京橋區南小田原町二丁目十二番地
印刷人 今井鐵次郎

印刷所 今井活版所

東京市本郷區駒込東片町廿六番地
發行所 本郷書院

賣捌
東京堂、上田屋、前川文榮閣、林平次郎、東海堂
北隆館、良明堂、大阪吉岡、杉本書店、久留米菊
本、名古屋川瀬、星野文星堂、其他各書林

大學教授文學博士 芳賀矢一先生校訂
大學助教授文學士 藤岡作太郎先生序文
文學士 佐藤芝峰先生著

英獨對譯 **小倉百首評釋**

定價金四拾錢 郵便税四錢

小倉百首一度出でしより爰に幾百歳、竜田吉野の花紅葉、宛として机上一册に匂ふの觀あり。文學士芝峰君、優麗婉婉の筆を以て之を釋し、英獨兩譯を加へて批言最も剴當を推す。文の妙、評の巧、現時の文界多く其例を見ざる所也。和歌を嗜むの士、語學を修むるの人、焉んぞ此書を閲せずして可ならんや。冒頭添ふる所の總論一篇、最も著者の識見を伺ふに足る。幸に一讀を玉へ。

東洋女學校
愛國女學校講師 高橋菊衞
三輪田女學校
日本女學校講師 櫻井岩衞 合著

新編 **實用裁縫書** 普通部

定價參拾五錢 郵税六錢
壹册百六拾頁、折圖七枚
其他大小挿圖百八十餘種

新編 **實用裁縫書** 高等部

本書は多年斯道の教授に從事して技術教授法等の實驗に富みたる兩先生の合著にして小學校高等女學校等の教科書參考書として最も適當なるのみならず家庭獨修の上に最も良好なる參考書なり殊に本書は從來世間に流布する此種の著書に比すれば材料豐富に文章平易簡明なるが上に頗る多數の插圖を以て精密懇篤に說明せられて毫も難解の弊なきものなれば斯道を研究せんとする大方の淑女請ふ一本を購讀して參考に供し給へ

與謝野鐵幹君
與謝野晶子君 合著
上田敏君序 内海月杖君序
馬場孤蝶君跋 薄田泣菫君跋
藤島武二君畫

毒草

四六大方形美本◎紙數百參餘◎特製(表紙クロース製)定價金七拾錢◎洋裝並製金五拾錢◎郵稅各金六錢◎市内小包料五錢◎製本既成

この夫妻の新しき詩文集を「毒草」と云ふ。知らず、讀む人をして醉はしむるや、睡らしむるや。躍りたたしむるや。唯見る、紅紫の花月もあやに、砂香、薰すばかり薰りぬ。初版早々盡きて、こゝに増補訂正第三版を出だせり。

押川春浪先生著

世界少年冒險譚

定價金三十錢
郵稅金四錢

月が黒いか、風が白いか、奇雨靈風慘として人目を暈せしむもの、是れ冒險譚の特色にあらずや。押川春浪先生は、現代冒險譚作者の白眉也、天嬌離奇の筆を提げて、蕩目の景に赴くや。黒汁淋漓として、牛鬼狐猜皆躍るの感あり。此篇、先生が得意の作を蒐めて一卷となせるもの、寔に一代の珍となすに足れり。其筆や奇、其文や快。明窓机の下執つて之を讀めば、彷彿として篇中の人となるが如し。鬼が出るか、蛇が出るか、請ふ此の作に就いて之を徵せよとこそ。

井上剣花坊序及閲
巖 鄉右衛門編

やなぎだる

定價金廿二錢
郵稅金二錢

簡勁にして深く人情に入り滑稽にして直に社會を描き美感を人に與ふるは即新川柳の生命なり
輕佻、浮薄、怠惰の社會を諷刺罵倒するは之れ新川柳の赤心なり、幸に新川柳の趣味に通ぜんと欲するものは必ず「やなぎだる」を一讀せざるべからず

初版旬日賣切再版

文學士 小原無弦先生譯

西吟新譯

近刻

本書は西歐詩星○ウヲーヅウヲース○スコット○フレチヤー○ヒーマンス夫人○カメル○ヘリック○ハイロン○バンス○ゲイ○ブラウニング夫人○ローガン○ロングフエロー○ユーゴー○テニソン等の名吟玉咏を小原文學士の彩筆を以て新詩型に譯せしもの也、西歐文學の精華を味はんとするの士は須く一本を座右に供へざるべからず

本郷書院出版目録

滑稽笑話

文學士 蜷川石水
工學士 渡邊清江 共著

定價金廿五錢
郵税四錢

新式の滑稽笑話○著者は工學士と文學士とで共に赤帽の兵隊さんである。話は總て嶄新奇拔で、滑稽笑話頤を解くまに〳〵人生百般のことゝ特に時局に關して、諷刺的訓戒的の新趣を漏して居る。紳士淑女諸君是非一本を購つて、新式の滑稽文學を御覽なさい。

初版忽ち賣切 三版

新詩社同人
山川登美子君
増田まさ子君
與謝野晶子君
合作
第二版

戀ごろも

中澤弘光君畫

山川登美子、増田雅子、與謝野晶子の三女史は、多年新詩社の閨秀作家として、詩名夙く「明星」紙上に顯れぬ、近時我國短詩壇の潮流いと新らしきものあるは、實に女史者首唱の力多きに由れり。わが書院曩に「毒草」を出だししが今また切に三女史に乞ひて此集を得たり。與謝野女史は既に二三の著あり。山川、増田二女史に至りては、この集を以て初めてその詩才を窺ふべし、世を擧げて功利に趨り、未だ文藝の眞價を知らず、書を讀めりと稱する者、往々猶偽善者の口吻を以て詩歌美術を律せむとする時に當り、明斷纖指の人、熱意かばかりに自家を語るを見るは詩界の偉觀なるのみならず、人間の榮譽、生命、まことに此に在るを悟るべきなり。

みだれ髪型美本◎紙數百三十頁◎前月印刷濟◎
十二月中旬出版◎壹册定價金四拾錢◎郵税四錢

發兌元 東京市本郷區東片町二十六 本郷書院

春鳥集

蒲原有明著

裝訂意匠●挿畫●青木繁君

定價金七十錢●郵稅六錢

著者の詩は徒らに新奇を街ふものにあらず。たゞ舊慣に甘んじ難きものありて、直に著者が胸裡に向て、そが餘孼を絶たむとする努力なり、隨てまた懺悔なり。こゝに精苦の作を試み長短積で漸く三十有餘篇を成しぬその多くは尋常敍情詩の陳域を脱して更に別途に出でたるものなり。著者はまた卷頭の自序に於て志すところの什一を敍べたり

文學士　久保天隨著

評釋 日本絕句選

定價三十錢
郵稅　四錢

人を以てすれば四十家、詩を以てすれば百首、菅公謫居の詠より以上、人口に膾炙する古今の名吟佳什大抵網羅して剩すなく、加ふるに、評釋の文、流麗婉美、一講すれば齒牙の香三日失せず。明窓淨几の上必ずこの好伴侶なかる可からず、敢て世上才人の一讀を勸む

文學士 尾上柴舟著
柴崎恒信畫

金帆

定價金四十錢
郵稅四錢

先生は溫順快活の人、其詩また流麗曲雅、當今佶屈聱牙澁怪奇を以て詩の能事とする風潮の中に起つて恰も熱砂の中を逝く一筋の清流のことくすら〳〵としたる風趣を以て一種獨特の新聲を試みたる此書收むる處四行詩、長詩、譯詩數十篇皆雋秀瑰麗西詩の眞髓を得て更に一歩を進めたるものこれ眞に現今詩壇の一明星也一曉鐘なり

◉初版 忽ち賣切 再版出來

本鄉書院出版目錄

文學士 上田敏著
藤島武二畫

海潮音

定價金壹圓
郵稅八錢

最新刊 表紙總クロース製 金文字入頗美本

歐州詩壇最近の思想と聲調とを紹介し之を新體の國詩に移植したるもの、かの清麗にして婉美なる詞華に奇想幽思を歌ひいでたる象徵詩人の作最も多し。彼邦の評界今なほ之に就いて詳細なる論議に乏しく吾邦の藝苑素より未だ之を傳唱すること無き清新の聲に樂まむとする人よ來てこの集に聽け。

本郷書院出版目錄

文學士 越廼背山著
時代笑話 滑稽文學 定價金廿五錢 郵稅四錢

文學士 小原無紘著
ユーゴーの詩 近刻

文學士 尾上柴舟著
森の歌 近刻

文學士 佐藤芝峯編
美文韻文 筆のあと 附作文大要

林